

学 位 論 文 要 旨

研究題目

強迫症に併存する身体醜形症の異種性に関して、
臨床像や治療反応性などの後方視的調査による多角的検討

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 高次神経制御系

神経精神医学（指導教授 松永 寿人）

氏 名 橋本 彩

精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版(DSM-5)において身体醜形症(BDD)は、強迫症(OCD)と同一の「強迫症および関連症」のカテゴリーに分類されたが、両者の関連性に関する知見はいまだ少ない。このため本研究では、OCD 患者を対象に BDD 併存を調査し、双方の発症順序を分類基準として、その臨床像を多角的に検討した。

精神疾患の診断・統計マニュアル第 4 版(DSM-IV-TR)および DSM-5 の OCD の診断基準を満たした 92 例に診断面接を行い、BDD の生涯罹病の有無を調査し、OCD と BDD のいずれが先行発症したかにより群別し、それら臨床症状や心理検査結果、治療反応などを後方視的に比較した。家族歴や生活歴、教育歴といった患者背景、OCD 発症から受診に至るまでの経緯や治療歴、他の精神疾患の既往、引きこもりや希死念慮を明白に伴う自殺企図歴、これを伴わない、あるいは不明瞭な自傷行為歴の有無などの臨床情報を聴取した。また、面接により初診時の機能の全体的評定尺度得点(GAFS)に加えて、強迫症状の内容や重症度を Yale-Brown 強迫観念・強迫行為評価スケール(Y-BOCS)日本語版で評定した。さらに BDD 併存例において、その発症年齢や経過、対象や繰り返し行動、BDD による回避行動、美容整形歴などを確認した。

結果、OCD 患者の 12 例(13%)に BDD の併存を認めた。この中で OCD が先行した群では、チック症や抜毛症、皮膚むしり症の生涯罹病が高率で、対称性に関するこだわりが、強迫症状や BDD 症状にも共通して見られた。一方、BDD が先行した場合、不安症、パーソナリティ障害などの併存、あるいは美容外科への受診歴がより高率で、巻き込み行為、引きこもり、自殺企図、衝動行為などの行動的問題がより顕著であった。また強迫症状では、汚染/洗浄、確認などの典型的なものが主であった。同様に治療に関しても、SSRI の有効性や非定型抗精神病薬による増強療法への反応性に、各群の差異的特徴を認めた。これらは OCD 患者に併存する BDD に、異種性が存在する可能性を示唆するものと考えた。